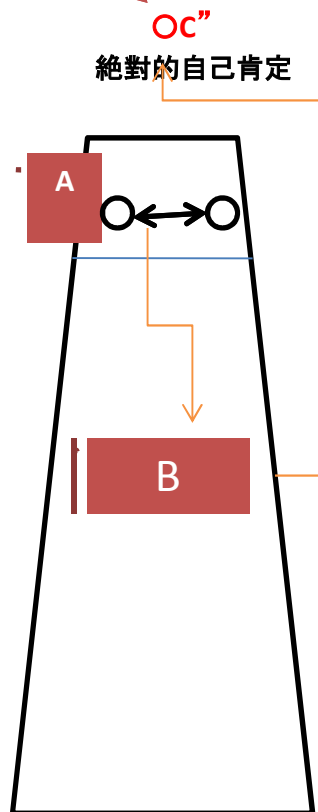


《日本の精神主義構圖》：日本は右圖の近代化概念を下圖の如く、表象(後楯)の概念としてしか捉へられなかつた。  
 $A \rightarrow B \rightarrow C'' = C2$  (西歐概念の後楯化現象)

◎C2：後楯・護符(西歐概念＝上位概念)

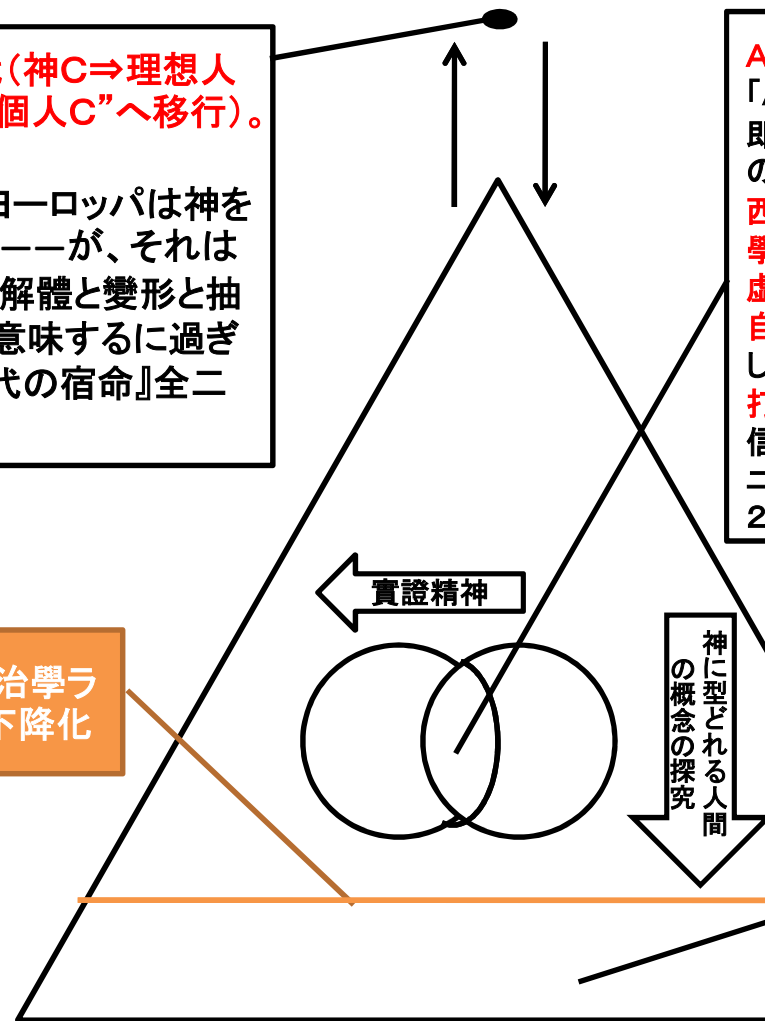


《彼我の差》西歐自然主義：「ヨーロッパの作家たちが自己(A')をあへて作品(B)のうちに扼殺したのは、「社會の醜惡と痼疾とを自己のそれとして受け容れた」爲に)、それ(A')がすでに實生活(A)においても生きる道をもたなかつたからであり、彼等はさういふ自己(A')を作品(B)のうちに甘やかすことを徹底的に嫌つたからであつた。いや、彼等は自己(A')のうちに甘やかしうる餘地を見いだしなかつた——(リアリズム=西歐自然主義によつて)それ(A')は**エゴイズムと虚榮と俗惡とのかたまり**以外のなにものでもなかつた」(『近代日本文學の系譜』P20)のを徹底的に思ひ知らされたからである。

西歐近代(神C⇒理想人間像C⇒個人C''へ移行)。

\*「近代ヨーロッパは神を見失つた——が、それはただ神の解体と變形と抽象化とを意味するに過ぎぬ」(『近代の宿命』全二P466)。

精神の政治學ラインの最下降化



A的(現實的)客體化：

「A客體 ⇐ A'主體」

即ち、「神に型どれる人間の概念の探究」として齎されたもの...

西歐自然主義文學(リアリズム文學)・個人主義等⇒「**エゴイズムと虚榮と俗惡とのかたまり**」と言ふ**自我の必然**を其處に見た。しかしその「**自我の卑小と醜惡とを鞭打する心**」には、精神Bの偉大さを信じ、自我の擴張を願ふヒューマニズムがかくされてある」(全一P21『近代日本文學の系譜』)。

B：「神は人體を失つて、**完全な精神**としての抽象化を受ける。その精神が文學(**西歐自然主義文學**)の領域」。